

私たちの町の文化財

■第6話 甚兵衛屋敷（摂取院）板碑群

今回紹介する「城山大塘字甚兵衛屋敷」には、貴重な板碑があります。現在は耕作地の一角に佇んでいます。『国郡一統志』によると、元は摂取院と呼ばれるお寺が存在していました。この摂取院跡に数ある板碑の中でも注目は、高さ180cmもある板碑です。正面には弥勒菩薩が蓮華座に坐した姿で表現されています。菩薩の左右には、左側に薬師如来「バイ」の梵字、右側に聖観音「サ」の梵字が彫られており、三尊形式をとります。弥勒菩薩というと、京都市太秦広隆寺の半跏像が有名ですが、摂取院跡の弥勒菩薩は、両足を組み、両手で定印を結び、手の上に五輪塔を持つ姿で表現されています。また右下脇の銘文には「奉書写一字一石」とみえます。つまり、小さな川原石一個に対し一字ずつ經典を書写し埋納した「一字一石経塚」であると分かります。經典を地中に埋納する風習は、平安時代に貴族の間で始まり、その後、聖と呼ばれる僧が諸国を巡礼したことで、現世利益や追善供養などを目的として、庶民の間でも納経活動が普及しました。こうした中、江戸時代には寺院が主導となり、現世利益を願う人々の手でお経が埋納されていきました。この碑の前に立つと、そうした時代を超えた先人の祈りが感じられます。

熊本市文化振興課 藤島 志考氏

摂取院板碑群：「せつしゅいんいたびぐん」と呼ぶのかな？板碑（いたび）は、主に供養塔として使われる石碑の一種らしい

